

キングに圧倒された作家の回想

森見登美彦

(作家)

『四畳半神話大系』『夜は短し歩けよ乙女』などの作品で知られる森見登美彦。大学時代に『太陽の塔』でデビューする前は、スティーヴン・キングという巨大な壁を前に悩んでいたという。『スタンド・バイ・ミー』に魅せられ、『IT』に衝撃を受けた中学時代を送った人気作家は、今キングに対して何を語るのか。

最初に読んだのは、たぶん『スタンド・バイ・ミー』（新潮文庫）です。中学一年ぐらいだと思っています。なぜこの本を買ったのか理由は覚えていませんが、おそらく映画のタイトルとして聞いたことがあったので、書店で手に取ったのだと思います。

それまであまり大人向けの小説を読んだことがなかったのですが、少年たちが主人公の物語なので感情移入できてワクワクしました。しかも森の中に入っていつ探検するというのは、僕自身も小学生から中学生にかけて家の周りでよくやっていたこと。同じように線路伝いに探

検できたらいいのと思いました。森へ入る目的が、行方不明になっている少年の死体を探していくという大胆な設定であるのもいい。森の中で焚き火をしてハンバーグを焼いてロールパンには喜んで食べる描写もおもしろかったです。小説の締めくくりもカッコいいです。時を経て大人になり、故郷のキャッスル・ロックに帰省した主人公ゴードイが、不良グループのリーダーだったエースが酒場に入っていくのを見て過去に思いを馳せる。若かりしころのエースはハンサムだったけれども、中年になり「雪崩のような肉の中に埋もれ」面影はなくなってしまう。

左手を見ると、今はもう川幅が狭くなっているが、少しは水がきれいになったキャッスル・リバーが、キャッスル・ロックとハーロウを結ぶ橋の下を流れているのが見えた。上流のトレッスルはなくなったが、川はまだ流れている。そしてわたしもまた、そうだ。
（『スタンド・バイ・ミー』山田順子訳／新潮文庫）
と言って終わる。いいですね。この本がきっかけでキングの作品を読み始めました。そんなにたくさん読んでいたわけではないのですが、『ゴールデンボーイ』（新潮文庫）『恐怖の四季 春夏編』（収録）、『クリステーション』（新潮文庫）、『シャイニング』（文春文庫）など……。

二〇〇円、上下巻合わせて六四〇〇円（当時）は中学生にとっては高かった。何回も立ち読みして悩んで、まず上巻を買って、読み終わってから下巻をようやく買いました。

当時、『ダーク・ハーフ』（邦訳九二年）や『トミノッカーズ』（同九三年、いずれも文藝春秋刊）などがポンポンとハードカバーで出版されたのですが、どれもすぐゴージャスな造本で、本屋さんで平積みされるとインパクトがありました。何より藤田新策さんのカバーイラストが素晴らしかった。その上、『IT』には真つ黒な帯に「豊穣としかいいようのない傑作中の傑作」というすごい言葉があつてワクワクしました。それがきっかけで「豊穣」という言葉が覚えた。実は読むときにこの帯を外してどこかなくしてしまったんです。それがずっとモヤモヤしていて、三年ほど前、ブックオフで帯つきを見つけて上下巻とも買って、帯を自分の持っている『IT』につけ直しました。

これまで読んだキング作品の中で一番面白いと思うのはやはり『IT』です。あのような規模の小説を読んだことが当時はなかった。とにかくデッカい。たとえるならアメリカがまるごとドカッと本の中に入っているような感覚でしょうか。二七年前と現在を行き来してストー



藤田新策のイラストが印象的な『ダーク・ハーフ』（文藝春秋）のカバー。

『スタンド・バイ・ミー』を読んでほどなく『IT』（邦訳は一九九一年に文藝春秋刊）が出版されました。近所の本屋さん、入ってすぐ正面にある平台に上下巻がドーンと並んだときに「なんだかすごい本が出た」と興奮しました。でも、一冊三

